

2010年8月7日(土) - 8月29日(日)

会場 ギャラリー CAVE

ウドム・ティムパクディー Udom CHIMPUKDEE

飯塚直司 IIZUKA Tadashi

岐部琢美 KIBE Takumi

鈴木亘彦 SUZUKI Nobuhiko

田中俊之 TANAKA Toshiyuki

夏池 篤 NATSUIKE Atsushi

濱坂 渉 HAMASAKA Wataru

2004年から2005年、新年を挟んだ約2週間、タイの古都チェンマイの国立大学、チェンマイ大学に、日本の作家が集いました。大学、高校で美術を教えながら制作を行う日本の作家8人と、チェンマイ大学美術学部彫刻科で教えるタイの作家7人との第1回日本・タイ彫刻シンポジウムが行われたのです。制作し、集い、共に食べ、また制作し・・・、穏やかな気候の中、緑豊かなキャンパスで、お互いを尊重した心地よい時間が流れました。

そして今、当時タイ側スタッフの中心であったウドム・ティムパクディーが来日し、愛知県立芸術大学を拠点に制作をしています。この二度目の出会いに際し、今度は日本側が彼を招いて展覧会を開きます。2005年、日本の作家達はタイの風景や人々に会い、タイの素材を用いて制作しました。そして今、ウドムは日本の素材を用いて制作しています。

あれから5年、それぞれの土地でそれぞれの時間を過ごした彼ら、場所を変えて再会する今、彼らの作品はどのように対峙するのでしょうか。

同展チラシより 山田志麻子（うらわ美術館学芸員）

<企画イベント>

- ギャラリートーク
Udom CHIMPUKDEE
+
参加作家による作品紹介
- ライブ
良知友見（イダキ演奏） 『心月輪』



UDOM CHIMPUKDEE

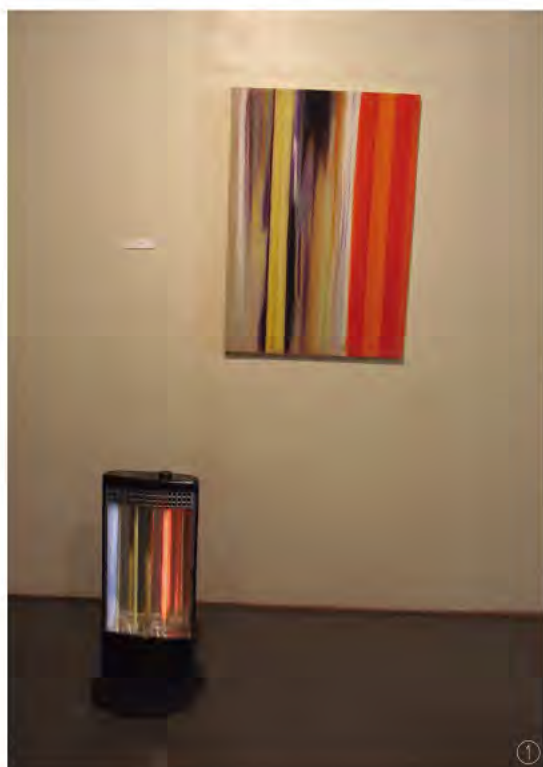
- 題名：Are you warm?
素材：Heaters Painting
題名：Origin of the circle
素材：pump
題名：Cooperation
素材：wood
題名：Relaxed Day
素材：Silicon and Bed

Creative process was sparked by my interest in experimenting with aesthetics, observing and analyzing the core beauty that is hidden within the elements and materials of the item, waiting to be discovered by the artist. From this starting point, it can be molded into something great by human imagination. With that, I look within myself to ask questions about this physical item, questions about all these items that humans have created. I am a creator too. Everyone of us are creating so many things. Do we have space for all these creations? Or are they to be discarded and accumulate as waste? Each culture has its own way of life. From an item's story, an item that has been designed for a certain country. My method involves collecting items and observing them. Sometimes the items are still intact and functioning where I can see the designers thoughtful process in creating the item; the

attention that has been put into creating it.

The first piece is a drawing of an old kettle. The second piece is a heater, associated with the warmth and happiness it brings in the winter. The next piece is a broken bicycle pump that I have found and fixed it to working condition. For its new working life, I have assembled it with an old bicycle tire to complete it. Another piece of item I found was a chest that had been in my possession for around three months, sitting there idle, as I could not think of how to use it until I found a broken blender. Then, bringing the two different pieces together to create new function for the two items. The blender was placed in the chest which created vibrations the audience can feel when they come near the piece.

A piece of sakura wood that was carved with Thai patterned birds was stamped with the insignia of crouching deer and Buddha by the audience; the piece conveys the similarities between the two cultures. The folding bed piece was repaired by me and restored back to working condition. During its time with me, it supported me in times of hardship, seeing my changing mood throughout the day. All aspects of the folding bed intrigues me: the way it can be folded and unfolded, being able to bear the weight. I see the transformation of my body as that of the bed, can be moved, can be folded, and can hold the weight. The images of a sleeping person and death emerge when the head is resting. Eternal resting, aligning oneself with the crust of the earth.



飯塚直司

IIZUKA Tadashi

題名：青空少年記

サイズ：h60 × w250 × d70cm

素材：鉄鑄物、水槽、椅子、水 他

2004年末にタイ王国チェンマイ大学交流展をきっかけとし、現在まで帽子をモチーフに、木、鉄、石の素材で制作を続けている。

2010年日泰交流展 in 浜松には、4点の帽子を出品した。

制作過程ではいろいろなことを思い感じ考えながら進む。現実的であったりなかったり、楽しい空想の世界が広がる様だ。作品を農家の庭先に置くのもおもしろいし、山の斜面に設置するのもありかなどと想像しながら完成に近づいていく。

この交流展では、作品は場面あるいは風景を意識して展示した作品であり、山や海や空に近づきたいと想いつつ制作したものであり、風が吹いてくれればいいと考えていた。

この機会を持てたことに関係者の皆様に心から感謝しています。



岐部琢美

KIBE Takumi

題名：THE PRESENT STATE

サイズ：h300 × w500 × d400cm

素材：鉄、アングル、ワイヤーロープ、鉄板 他

物と物がぶつかる場所、壁に取り付けた箇所など異なる物質や素材が交差する場所、異なる素材が出会う場所等のディテールに拘わり、空間の可視化とニュートラルな空間の出現を垣間見たい。



鈴木亘彦

SUZUKI Nobuhiko

題名：Swamp Case - Cogwheel

サイズ：h65.8 × w50.6 × d5.0cm

素材：硝子、鏡、ハンダ、木材、合成樹脂、
他

ガラスや鏡、レンズなどを用いて制作することは、光の屈折や反射などの効果を狙い、実体のないところに影や光が影響すれば、そこに居たものにしか解らない存在が空間にできると考えたからだ。それは未だ見ぬものへの実験の試みのつもりだった。

しかしながら透過性のあるガラスや合成樹脂でつくった外見からは、中を覗くとまた何かが入っているのが見える。そこには視覚の揺らぎや屈折があり、影や光のノイズは内側に影響して実態を曖昧にしまった。何が有るのか覗き込むことで、それは私的な「思い」のはぐらかしのようになってしまった。



田中俊之

TANAKA Toshiyuki

題名：Babbling/ 喃語 (2009)

サイズ：h25.4 × w17.8 × d22.8cm

素材：型吹きガラス、ポンプ、木材、
液体洗剤、水、他

2009年1月、キノコ雲のかたちとその動きが頭を離れなくなってしまった。泡を使って何か出来ないものかと試行錯誤していた時、その動きを再現する為にガラス容器の中で泡を循環させようとしたが、泡を閉じ込めておく事が出来ず、小さく開いた穴からそれは吹き出してきた。そこから泡は育ち始めた。

ヒンドゥーのリンガは生産のシンボルである。他方で現代のファリシズム (Phallicism、男根崇拜) の象徴は破壊を意味するものばかりが目立つ。幸いなことに、アジアでは今でもおおらかなファリシズムが民間信仰や祭儀の中に残っている。それは一見、野蛮なものと理解されるかもしれない。しかし、本当に野蛮なのはどちらのファリシズムなのだろうか。



夏池 篤

NATSUIKE Atsushi

題名：From Printer

サイズ：h15 × w180 × d180cm

素材：プリンター部品、鉄、振動モーター、
IC、紙コップ

かく多くの電化製品が山のように捨てられていく昨今であるが、とりわけ消費期限の短い情報関連機器においてその流れはとどまるところを知らない。当方もpcから出力ポートの無くなったRS232C仕様のモノクロプリンターは処分せざるを得なくなった。ゲーテンベルグ以来の印刷媒体とデジタル情報の仲立ちを請け負うこの機械はいつまで人類に必要とされるのだろうか。今回は絵や文字という意志伝達のための記号をひたすら印字するために統率されてきたプリンターの部品をアートにおける意志伝達のための部品として陽のあたるステージに上げてみた。



濱坂 渉

HAMASAKA Wataru

題 名：舟の中の舟・双胴舟Ⅰ

サイズ：W64 × D37 × H21cm

素 材：白花崗岩（矢掛）、水

2003年に、私は1970年代の後半部に試みていたが、発表するチャンスがなかった水に浮かんだ彫刻のシリーズを再開しました。

同じ石から、水を溜める形と水に浮かぶ形を削り貫くことによって彫刻を造ることを始めました。

岩船（磐舟、石槽）は、極東（日本）の神道の聖地とされている境界の入口に設置されています。そこから、常にきれいな水が湧き出ます。韓国においても、仏教寺院に同様な岩船が設置されていた遺跡があります。

私は、石造物で見られる民族的な文化の表現力の特徴を知ることによって、彫刻を作る従来の方法に加えて、これらの伝統的な文化的遺産その他を参照して一般的な表現の理念的な可能性について考えました。



今月29日までの毎週末、浜松のギャラリーケイブで「日泰交流展」が開かれている。日本の作家6人とタイの作家1人によるグループ展だ。

きっかけは5年前、タイのチェンマイ大学で「日本タイ彫刻交流シンポジウム」が開かれ、それに参加した日本の作家達が主体となって、この春から来日して制作を行っているタイのウドム・ティムバクディーを招いて開いたものだ。

ウドムは日本で制作した5点を出品している。中でも印象的なのは中古の電熱式ストーブを用いた「Are you warm?」。彼は、二本の発熱体の一本が赤く光り、もう一本が冷ややかに隣り合っている様をカンヴァスに描き、その手前に、実際にストーブを置いた。熱を発することのない虚像のストーブと、猛暑の中で強烈な熱を発する実在のストーブ。1960、70年代に隆盛したコンセプチュアル・アート（概念芸術）の旗手、ジョゼフ・コサースの、虚像と実像と概念とを並置した作品を思わせなくもないが、コサースのクールな理知的作品に比べ、ウドムの作品は文字通り熱（暑）い。彼が受けたであろう視覚的、皮膚的感覚を直に体感させてくれる。その近くには扇風機を用いた「Relaxed Day」。その風は、ビーチチェアにシリコンで描かれた寝そべる骸骨に向けられ、風でハタハタと揺れる椅子の上でくつろぐ薄っぺらな骸骨は、どこかユーモラスで哀愁を漂わせている。今回、ウドムはいくつもの捨てられた素材を用いている。日本ではリサイクルといえばエコロジーの文脈で語られるが、敬虔な仏教国タイでは、輪廻の思想につながるという。

5年前に行われたタイでの交流展では、日本側とタイ側の作品の間に、明確な傾向の違いが見られた。蛍光灯やLED等の工業製品を用い、空間に溶け込むような軽快さを持つコンセプチュアルな日本の作家の作品と、木や石等の自然の素材を用い、量塊を伴い彫刻的で、仏教的・民族的モチーフを多用したタイの作家の作品は、むしろ対照的でさえあった。

その後、各国のアーティストと交流を重ね、今回日本に長期滞在して日本の素材を用いて制作しているウドムと日本の作家との間には、以前のような明確な差は感じられない。リサイクルにも、生死や物に対する見方の違いや共通点が見え隠れする。

一方、日本の作家の作品の中から廃品を用いたものを探してみると、夏池篤の「FROM PRINTER」があげられる。壊れたプリンターを約140個のパーツに分解し、携帯電話用のバイブレーターで細かく振動させた作品だ。機械の中で必然的な形と機能を持って人目に触れることなく動いていた部品が、無用の形となって小刻みに震える。それぞれの形の面白さとデペイズマン（文脈を置き換えることで意外性を導く）

の手法によって、無機質な物体がある日突然生まれ変わり、賑やかに語り始めたかのような楽しさがある。

同じく夏池の作品に、日泰両国の出生率と死亡率を元に、赤と青のLEDが生と死の瞬間にそれぞれひとつずつ点灯していく対の作品がある。ある一定数になると光は消え、また静かな時間が繰り返されていく様は、輪廻を思わせないだろうか。

他の作家はどうだろうか。会場入口には盆栽をかたどった田中俊之の作品。近寄ってよく見ると、枝からは小さな泡が噴き出している。遠目で見れば冬枯れの枝に積もる雪のような風流さも感じられなくはないが、ほのかに石鹸の香を漂わせながら出てきては消える泡は、どこか可笑しみを誘う。夏池篤の隣には鈴木巨彦の鏡や樹脂を用いた作品。一見ガラスに雫が結露しているように見える、繊細で涼やかな作品だ。奥には飯塚直司による帽子をかたどった鋳鉄の作品。磨き上げられた金属の冷たい輝きと、錆を生じさせた触覚的な肌理のコントラストが心地よい。一番奥には岐部琢美の作品。鉄のフレームによって組まれた巨大な立方体が一本のワイヤーロープで支えられ、空間の中でぎりぎりの緊張感で留まっている。離れて見れば、立方体の面は線と化して量感を失い、私達の視覚の頼りなさを露呈させる。その手前には濱坂渉の石彫作品。花崗岩を舟形にくりぬいて水を入れ、更に入れ子状に花崗岩の舟を浮かべる。重い石の舟を支え、その表面張力で盛り上がった水面は硬質で美しく、水に浮かぶ小さな舟はかすかに、ゆったりと揺れている。

情報や快適さにまみれて鈍化した私達の感覚を研ぎ澄ませ、ものの見方を問い直させること、それが現代の美術の力のひとつとするなら、この展覧会は様々な感覚や見方を呼び起こさせてくれる。重さや冷たさ、音や匂い、肌触りや視覚の危うさ等、五感を刺激する作品も多い。これらの五感をフルに働かせて見るもよし、かすかに漂うユーモアを楽しむのもよし、死生観や輪廻、そして両国の文化を考えるもよし、様々な楽しみ方ができそうだ。

(2010年8月23日静岡新聞掲載記事より加筆、訂正)